明治期の国民国家形成を学ぶ歴史文化学習の開発

―唱歌を教材として―

B4E12040　中村美紀

はじめに

本論の目的は、明治期の国民国家形成を、軍事・政治・経済面からだけではなく文化面からも行われたものであったと、生徒たちがみることができるようになる中学校歴史学習を開発することである。換言すれば、欧米諸国に負けないような国づくり・国民づくりは、感性の側面においても行われていたという認識を持たせられる授業を開発することが本論の目的である。このように考えるのは、学習者に歴史事象を多面的・多角的に考える力をつけたいからである。

教材としては唱歌を採りあげる。

従来の歴史文化学習は、その時代の芸術の特色を理解することにとどまっている。例えば、中学校歴史教科書では、まず鎌倉文化では武家を中心とした文化であるという概要が示され、次に代表的な文学作品、美術作品、宗教の特色が述べられ、それらを時代の特色と結びつけて解説するといった流れが主流である [1]。筆者は、歴史文化学習が歴史の全体の動向から切り離されて展開することは問題だと考える。問題とは、歴史学習において、時代の風潮を人々の感性の変革と関連させて考えることができない点である。歴史上の文化には、その時代で大切にされた人々の感性が反映されている。さらに、歴史文化をどのような立場の人が推し進めていたかによって、歴史全体の動向を考えることができる。以上のことから本論では、国が推し進めた軍事・政治・経済と並んで音楽が近代的な国家にふさわしい国民づくりのために用いられたことを学習できる中学校社会科の授業開発を行う。

筆者は学習者に歴史事象を多面的・多角的に考える力をつけるために、明治期の近代国民国家形成を文化面からもみられるようになるという認識の「拡大・深化 [2]」を図っていく。吉田正生は「認識の拡大とは、文化、なかんずく音楽・美術を国民国家の形成と結びつけて見ることのできる視点を習得できることである [3]」とし、「認識の深化とは、明治政府が音楽・美術政策を積極的に進めた理由を説明できるようになること [4]」であるとしている。筆者も吉田の考え方に賛成である。また、吉田は授業書の形式で指導プランを作成している。授業書ならば、教科書以外の多くの資料の読み取りを行う時間をとることができる、というのが

---

[1]『社会科　中学生の歴史―日本の歩みと世界の動き―』帝国書院（平成 27 年 3 月 31 日　文部科学省検定済）、pp.59-61。
『[新編]新しい日本の歴史』育鵬社（平成 27 年 3 月 31 日　文部科学省検定済）、pp76-77。
『中学社会歴史的分野』日本文教出版（平成 27 年 3 月 31 日　文部科学省検定済）、pp.70-71。

[2] 吉田正生「授業書『明治政府の国づくり・国民づくり』の開発―美術・音楽政策を組み込んで―」（未発表）、p. 2。

[3] 同上論文、p. 2。

[4] 吉田、同上論文、p. 2。

その理由である。本論が教材とする明治政府の音楽政策も、どの中学校教科書においても取り上げられていない。また資料集にも見られない。よって、筆者は中学校での授業書を用いた授業開発を行っていく。

次に教材について述べよう。教材として、先に述べたように唱歌を取り上げる。唱歌とは何か。渡辺裕は『歌う国民』（中央公論新社）の中で、唱歌と童謡の違いについて次のように述べている[5]。

> 童謡は、大正期に北原白秋（1885-1942）、野口雨情（1882-1945）、西條八十（1892-1970）らの詩人や、弘田龍太郎（1892-1952）、山田耕筰（1886-1965）らの作曲家たちを中心に広がった「童謡運動」と呼ばれる運動によって生み出されたものなのですが、唱歌はその際に仮想敵とされていました。…（中略）…。「文部唱歌」に代表される「唱歌」は簡単に言えば、国民啓蒙という目的で作られた、まさに「国民づくり」的な性格の強いものでした。そのため、歌詞の内容も道徳教育や歴史教育などに偏するなど、芸術性が欠けており、子供の情操教育上よろしくない、それゆえ、それに代わる新しい歌を作って子供に与えるべきだ、というのが童謡運動の考え方でした。

そうは言うもののメロディや歌詞などの点においては、唱歌と童謡の区別はつけにくい。しかし渡辺は、唱歌の歌詞には童謡よりも色濃く国民啓蒙の視点が含まれていると述べている[6]。詳細については後述するが、この「国民啓蒙」の色彩が濃厚であるということが唱歌を教材として採りあげる理由である。

明治期の日本では、「富国強兵」を推し進めるために唱歌を用いて日本国民の近代化を進めていったのである。唱歌導入の中心的な存在であった東京音楽学校とその前身である音楽取調掛は明治以降の日本の近代化のために、積極的に西洋音楽を取り入れていった。明治の日本は、政治や経済、軍事など国の諸制度も未完成であったのに、なぜ音楽という分野にまで手を出したのか。その理由は、18 世紀末から 19 世紀にかけての西洋音楽が「自律化[7]」や「政治化[8]」といった力を持っていたからである。「自律化」というのは、音楽はそれまで宮廷や教会と結びついて価値を持っていたのに対して、純粋に作品としての芸術的価値を持つものへと変化したことを指す。それに加えて、政治的な動向の中での音楽の持つ意味も大きくなっていった。それが合唱である。皆で声を揃えて歌う合唱を通して、音楽の「政治化」が進んでいった。

このような役割を担わされた唱歌を教材に選定した理由は 2 つある。1 つは、社会の制度や仕組みを唱歌と関連させて学習することで、軍事・政治・産業等の面に加えて広い視野をもって歴史学習を行うことができると考えるからである。つまり「富国強兵」という考えのもとで、明治新政府のつくりだす政治・経済・社会制度・仕組みと唱歌という文化を関連させる。これによって、政治権力が政治制度や経済制度を整えようとしたのみならず、文化面においても人々の感性に働きかけることによって、国民創出・統合を行おうとしたという、政治史・経済史・社会史・文化史を統合して、生徒に歴史を広い視野をもって捉えさせるこ

---

[5] 渡辺裕　2010 『歌う国民』中央公論新社、pp.39-.40；但し、括弧内は引用者。
[6] 同上書、pp.8-10。
[7] 同上書、p.46。
[8] 同上書、p.46。

とができるのである。

唱歌が日本人としての意識を高めるための「コミュニティ・ソング [9]」としての役割を果たしていたからこそ、西欧列強に負けない国づくりに向かう国民をつくることができたと言える。岡田は『ハイカルチャー　近代日本文化論 3』（岩波書店）の中で、日本人の音楽的美意識が変革されはじめたのは明治期ごろだったと主張している [10]。近代日本の音楽の在り方を西洋のものに染め変えていくことによって、日本の伝統的な音楽的意識を払拭し、西欧諸国と肩を並べる近代的な音楽的感性と素養を持った国民づくりを行ったという歴史学習を構成することができる。

唱歌を教材に設定した 2 つ目の理由は、今日の社会にとって、音楽と人々の生活がより密接な関係にあるからである。例えば、東日本大震災の復興支援プロジェクトの際の『花は咲く』がある。東日本大震災の復興支援プロジェクトの際には NHK が『花は咲く』を復興支援ソングとし、復興支援の取り組みの一つとしてテレビ・ラジオを通じて流された [11]。また、2016 年夏季にリオデジャネイロで行われたオリンピックの際の応援ソングなどが挙げられる。日本を応援するためテレビ局各社が協力して共通の応援ソングを設定し、オリンピック報道の BGM として流していた。これらの歌には、音楽を楽しむという歌としての役割に加えて国民に何らかの思いや願いを持たせよう、あるいはそうした願いや思いを強化しようと働きかける役割も与えられていたのである。

以上述べたように、音楽の果たす役割は単純な娯楽機能だけではなく、社会の動向から思いや願いを発信していく手立てとしての機能があるのである。筆者は、このような音楽の果たした役割を中学校社会科学習の段階でも考えることが必要であると考える。普段の生活では音楽を耳にする機会が多い。インターネットの普及に伴い、世界中の音楽に触れる機会も増えている。音楽が政治的な意味をもったり、人々の心を動かす材料として使われたりすることもある。将来このような世の中で生きていくためには、音楽が持つ機能を知っておく必要がある。歴史事象を多面的・多角的に捉えるという経験を通して、このような社会に出たときに物事を広い視野でとらえることができるようにしていきたい。

学習指導要領の中学校歴史分野、明治期の歴史学習の内容（5）イ「開国とその影響、富国強兵・殖産興業政策、文明開化などを通して、新政府による改革の特色を考えさせ、明治維新によって近代国家の基礎が整えられて、人々の生活が大きく変化したことを理解させる。[12]」と明示されている。また、内容（5）エには「我が国の産業革命、この時期の国民生活の変化、学問・教育・科学・芸術の発展などを通して、我が国で近代産業が発展し、近代文化が形成されたことを理解させる [13]」とあり、内容の取扱いについては「エの『我が国の産業革命』については、イの『富国強兵・殖産興業政策』の下で近代産業が進展したことと関連させて取り扱い、都市や農山漁村の生活に大きな変化が生じたことに気付かせるようにすること。『近代文化』については、伝統的な文化の上に欧米文化を受容して形成されたもの

---

[9] 渡辺　同上書、p.46。

[10] 岡田暁生「教養主義・根性主義・技術主義―近代日本の西洋音楽理解をめぐって―」p.118、大塚信一　2000『ハイカルチャー　近代日本文化論 3』岩波書店、pp.116-133。

[11] NHK 東日本大震災プロジェクト『「明日へ」復興支援ソングのご案内』（閲覧日：2017 年 12 月 7 日）http://www.nhk.or.jp/ashita/themesong/

[12] 『平成 20 年版中学校学習指導要領解説　社会編』文部科学省、p.82。

[13] 同上、p.84。

であることに気付かせるようにすること。[14]」とある。上記の「学問・教育・科学・芸術の発展などを通して、我が国で近代産業が発展し、近代文化が形成されたことを理解させる」に即して歴史文化学習を展開するとき、唱歌導入によって感性の面からも人々の近代化を推し進めた――西洋に負けないような国づくり・国民づくりを行った――という見方をすることができる。しかし、小学校・中学校・高等学校の教科書 14 冊を分析した結果、近代文化と富国強兵をめざした明治期の歴史の動きが連動していないことが明らかとなった。

教材を唱歌とし、単元構成の基本的考え方においては、吉田正生の『授業書「明治政府の国づくり・国民づくり」の開発―美術・音楽政策を組み込んで―」を参考にすることとした。

吉田論文を土台に据えるにあたって、明治日本の文明開化の学習の先行研究分析を行った。その結果、吉田論文が筆者の目指す授業像に最も近いと判定したため、吉田論文にある指導プランを参考に、筆者の授業プランを構成することとした。

読み物資料作成の際には、唱歌導入に尽力した伊沢修二を取り上げる。唱歌や明治期の音楽に関連して、中学校の社会科教科書が取り上げているのは滝廉太郎あるいは山田耕筰である。しかし、滝も山田も作曲家であるため、彼らを取り上げてしまうと、彼らの作品に注目することになってしまい、国家が西洋音楽を導入して近代国家にふさわしい国民づくりを行おうとしていたという側面を扱いにくくなる。つまり、社会の制度やしくみとらえさせる社会科としての性格がなくなってしまうのである。そこで、伊沢修二の働きを中心に国が音楽の力で国づくりや国民づくりを図っていったことを取り上げる。

以上を踏まえて、本論では次の２つの観点を取り入れた授業プランを開発する。

（１）富国強兵のため軍事・政治・経済面だけでなく文化面から人々の感性に働きかけた歴史学習

（２）唱歌を教材として設定し、歴史の全体像と分断されない明治期の近代文化学習

以下、本論を次のように構成する。まず、先行研究や実践について分析を行い、課題点を明らかにしたうえで、本論の目指す授業像を明確にする（Ⅰ章)。次に、土台となる吉田正生の『授業書「明治政府の国づくり・国民づくり」の開発―美術・音楽政策を組み込んで―』から、本論の目指す授業モデルを提示する（Ⅱ章)。続いて、なぜ唱歌を教材として設定したのか等、教材研究について論じる（Ⅲ章)。最後に、唱歌を教材として富国強兵のため文化面から人々の感性に働きかけた歴史文化学習の単元と指導計画を作成する（Ⅳ章)。

[14] 同上、p. 84。